

# Summer

## 全国大会 参加報告 ～ 2024 ～

・令和6年度全国高等学校総合体育大会サッカー競技大会



Report No.1

参加大会：令和6年度全国高等学校総合体育大会サッカー競技大会

参加期間：令和6年7月29日(月)から令和6年7月31日(水)

場所：Jヴィレッジ

宿泊先：Jヴィレッジ

備考：兵庫県高体連研修審判員として参加

目次：1. 担当試合振り返り

2. 試合観戦をして

3. 研修会

4. 終わりに

## 1. 担当試合振り返り

① 令和6年7月30日(火)12時00分キックオフ 3回戦

会場：Jヴィレッジ P5

対戦：昌平(埼玉県代表) VS 福岡大若葉(福岡県代表)

割当：高橋海星氏 (主審、北海道、2級)

大槻隼人 (副審1、兵庫県、2級)

藤井翼氏 (副審2、岐阜県、2級)

長谷川翼氏 (第4審、千葉県、3級)

インストラクター：森本洋司氏

結果：2-0 (1-0、1-0) 勝利高校：昌平

### [ゲームの内容]

昌平は各個人のレベルが高く、フィールドプレイヤー全員が相手選手を剥がすのに長けていて、ドリブルやショートパスを使いながらボールを保持、迫力のある攻撃を繰り返していました。福岡大若葉は、昌平のサイドのプレイヤーを警戒して5バックを採用。相手を引き込みながら、前線に残る2トップでカウンターをしかける戦術をとっていました。

3回戦ということもあり、両チーム固くなることなく本来の力を発揮していたように感じました。昌平がボールを保持、福岡大若葉の中盤が3枚ということもあり、サイドに展開した際にスライドが間に合わなくなり、その際できたスペースを中央ドリブルで突破していく攻撃が有効的でした。昌平はスピードにのったドリブルでもパスをずらすことなく通せており、レベルの高さを感じました。福岡大若葉は、サイドをやられないという戦術は効果的であったが、逆に中央のプレッシャーが緩くなってしまい失点を許してしまいました。失点后、福岡大若葉は、攻めなければいけないが、攻め手がなく、ボールを奪いに行こうとしても、ドリブルで剥がされたり、できたスペースにパスを通されたりと、苦しいゲーム展開でした。

## [副審2を担当して]

今回の大会を通しての審判団のテーマが「主審と副審との協力～最適なコミュニケーションについて～」でした。事前の研修でも、タッチジャッジの指し間違いが多いという指摘があったので、主審とアイコンタクト、シークレットサインで副審としての判断を主審に伝えようと思い、試合に臨みました。難しいタッチジャッジの判定はなかったものの、ゲームを通して、指し違いなく終えることができました。

また、クーリングブレイクの時間の管理やクーリングブレイク後の再開方法の確認、第4審と警告の番号の確認や、アディショナルタイムの確認など、些細な事でも1つ1つ口にだしてコミュニケーションをとることができました。自然と、審判団としてのチームの一体感も出たように感じました。個人的に苦戦したことは、オフサイドラインをキープすることです。昌平のサイドの選手の初速がとても早く、DFがスループスを蹴るとき正体してオフサイドを判定したあと、走っても離されるシーンがありました。普段は、正体からスプリントで間に合うのですが、今回のゲームで間に合わない初めての感覚でした。試合中にスタートの切り方を工夫することで改善できたのも良かったです。

### ② 令和6年7月31日(水)9時30分キックオフ 準々決勝

会場：JヴィレッジP3

対戦：市立船橋(千葉県代表) VS 米子北(鳥取県代表)

割当：山本雄大氏 (主審、岡山県、2級)

川田昇太氏 (副審1、静岡県、2級)

中村吉伸氏 (副審2、福岡県、2級)

大槻隼人 (第4審、兵庫県、2級)

インストラクター：野田祐樹氏

結果：0-1 (0-0、0-1) 勝利高校：米子北

## [ゲームの内容]

個人技で上回る市立船橋がボールを保持し攻めようとする中で、米子北は奪ったら前線の2トップにロングパスを供給、中盤でセカンドボールを拾い攻撃を組み立てようとしていました。試合序盤は市立船橋ペースであったが、米子北が運動量を増やし、セカンドボールを拾え始めました。数少ない決定機を米子北が決め、先制すると、持ち前の運動量、ハードワークで市立船橋の攻撃を死守し、勝ちを収めました。

## [第4審を担当して]

今回担当したゲームで苦慮したことがベンチコントロールでした。米子北の監督が、主審の判定に、声でアクションを起こされることが多く、どこまで許して、どこからが許されないか、考えていました。以前、関西の研修で教えて頂いた、「傾聴」を意識し、監督が言いたいことをピッチや主審に言わせるのではなく、私と話の中で言ってもらうことで、必要以上に主審に矛先がいくことなく、また見ている方々も嫌な雰囲気を感じることなく観戦できるように繋げられたと思います。また、後半には、大きな声でアピールがあったので、その際は毅然とした態度で前に入り、注意できた点も良かったように思っています。「傾聴」と「毅然とした態度」の使い分けが上手くできたと思っています。

交代やアディショナルタイムも主審や副審1と適切にコミュニケーションをとりながらスムーズにできました。

## 2. 試合を観戦して

- ① 令和6年7月30日(火) 9時30分キックオフ  
対戦：米子北(鳥取県代表) VS 国見(長崎県代表)  
結果：2-1

両チーム、ロングボールを多用するチームでポジションの難しさを感じました。少しでも切り替えが遅くなると、ロングボールの争点に串刺しや見えにくくなってしまいます。また、セカンドボールの予測もなく、ロングボールの争点に近づくとセカンドボールを拾いにくる競技者の邪魔になってしまいます。

暑い中、体力、集中力ともに、審判にとってタフなゲームと感じました。また、米子北のDFが持っているボールを国見のFWが奪うシーンも何度かあり、主審の切り替えの難しさにもつながっていました。DFのボールの持ち方、FWのプレスのスピードから適切な予測をすることが大切だと思います。

この試合を担当している主審のシグナルが気になりました。動きながら、判定シグナルをするので、慌ただしく、余裕がないように感じました。すべて止まった判定、シグナルができるわけではありませんが見せ方、見られ方も試合に影響を与えていると感じました。

- ② 令和6年7月31日(水) 12時45分キックオフ  
対戦：帝京長岡(新潟県代表) VS 青森山田(青森県代表)  
結果：1-1(PK 3-2)

この試合では主審の判定が安定せず、また、ベンチからの声にも毅然とした態度を示せずコントロールを失ってしまいました。判定が安定しない理由は、動きすぎではないかと思います。争点に寄りすぎるので、次の争点に遅れてしまっていたり、争点になる前の選手の雰囲気、争点以外の出来事を捉えられなくなっていたりしました。

また、ベンチからの異議に対しても、毅然とした態度を示せていませんでした。ベンチへの注意も、フィールドの真ん中でジェスチャーのみ。それでもベンチからの声は収まらず、副審1からのサポートでベンチに警告を出しにっていました。難しいゲームであったと思いますが、この様なゲームこそ、主審としての強さが必要だと感じました。

## 3. 研修会

- ① 日時：令和6年7月29日(月) 19時30分から20時30分  
方法：Zoom

1回戦、2回戦の様子、警告、退場の数などの共有がありました。特に2回戦では、退場が後半のアドショナルタイムで起きている、最後まで気を抜かないようにということでした。また、第4審が席から離れて、ベンチ前で主審とは逆のタッチジャッジのサポートをして、ベンチから指摘されることがあり、第4審は基本的には席を離れないほうが良いとアドバイス頂きました。

② 日時：令和6年7月30日(火) 19時30分から21時00分

方法：Zoom

初めに、その日のゲームで起きたことの共有を行いました。特に話題になったのが、PK戦でキッカーが笛を吹かれてから蹴るのが遅いということです。約25秒かかっていた、競技規則上問題はないが、審判団としてどうするか、考えてほしいということでした。その後、映像を2つ共有して頂きました。1つ目は、主審がノーファウルと判定した場面を副審がファウルサポートでDOGSOを伝え、退場にしました。2つ目は、主審がDOGSOで退場と判断しました。しかし、映像ではFWが先に反則をしているようなシーンがあり、そのシーンを見えた可能性のある第4審や、副審1が自分だったらどうする？という研修でした。どちらも、とても難しく勇気が必要なシーンでした。やはり大前提として、主審が大きな判定は決めきる、責任を持つということです。そのうえで、確実に主審が間違っているという情報を持っているなら、自分であれば勇気を持って行動できる副審や第4審でありたいと改めて思いました。

#### 4. 終わりに

3度目の全国大会ということもあり、これまで参加した全国大会に比べて、自分の任務を落ち着いて遂行することができました。また、苦手意識のある、ベンチとの関りも、チャレンジすることができ、充実した3日間でした。また、これまでは、サッカーのレベル、他の地域の審判のレベルに圧倒されていましたが、今回は自分も、主審がしたい、自分であればこうしてみたい、という考えを持つ余裕が生まれていました。このピッチで主審ができるよう日々努力を重ねていこうと思います。

また、福島県審判部の方々には設営や細やかな点までサポートして頂きました。お陰様で私たちも活動しやすく、審判業務に集中できたと思います。ありがとうございました。

高校年代の最高峰のレベル、スピード感を体感できました。審判としてだけでなく、高校教員、サッカー部顧問としてもこの経験を活かしていきたいと思います。